

教 員 個 人 調 書

教 育 研 究 業 績 書

2026 年 4 月 20 日

氏名 椿井 裕樹 ㊟

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
神経系理学療法	脳科学、バランス、転倒予防	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 ・アクティブラーニング型講義	2014年4月～	・反転授業を導入し、自己学習する機会を設けた。
2 作成した教科書, 教材 ・講義用スライドの作成（中枢神経障害理学療法学） ・小テストの作成（運動療法概論）	2014年4月～ 2010年4月～2026年3月	・数冊の教科書や各種ガイドラインをベースに、脳血管障害の理学療法のスライドを作成し、視覚的に理解しやすい工夫をしている。 ・小テストを作成し、習熟度の確認を行っている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項	2010年4月～2011年3月 2011年4月～現在	ユマニテク医療専門学校 理学療法学科 専任教員 ユマニテク医療福祉大学校 理学療法学科 専任教員 2018年4月～学科主任 2021年4月～副学科長 2024年4月～学科長
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格, 免許 理学療法士 第46回理学療法士・作業療法士 ・言語聴覚士養成施設教員等講習会 登録理学療法士 第914回臨床実習指導者講習会 認定理学療法士（脳卒中） 脳卒中療養指導士	2005年4月12日 2019年9月 2022年4月 2022年11月 2025年4月 2025年5月	厚生労働省 厚生労働省、公益財団法人医療研修推進財団 日本理学療法士協会 厚生労働省 日本理学療法士協会 日本脳卒中学会
2 特許等		

<p>3 実務の経験を有する者についての 特記事項</p>	<p>2005年4月～ 2010年3月</p> <p>2011年4月～ 現在</p> <p>2021年8月～ 2024年3月</p> <p>2007年6月～ 2009年10月</p> <p>2008年4月～ 2009年3月</p> <p>2009年4月～ 2009年10月</p> <p>2011年4月～ 2015年3月</p> <p>2014年4月～ 2015年3月</p> <p>2022年7月～ 2023年3月</p>	<p>三重大学医学部附属病院 リハビリテーション部</p> <p>介護老人保健施設いこいの森 リハビリテーション科</p> <p>川越町デイサービスセンター 機能訓練室</p> <p>第44回全国学術研修大会 in 三重 準備委員</p> <p>第20回三重県理学療法学会 準備委員</p> <p>国立大学法人リハビリテーションコ・メディカル学術大会 運営局長</p> <p>三重県理学療法士会 社会局部員</p> <p>三重県理学療法士会 社会局 厚生部長</p> <p>第33回三重県理学療法学会 準備委員長 座長（教育管理）</p>		
<p>4 その他</p> <p>福祉用具セミナー講師</p> <p>地域保健・福祉における災害対応標準化 トレーニングコース修了 (Basic Health Emergency Life Support for the Public : BHELP)</p> <p>関東ブロック PFA 研修会修了</p> <p>第4回ロジリーダー養成研修会修了</p>	<p>2025年8月</p> <p>2026年2月</p> <p>2026年2月</p> <p>2026年3月</p>	<p>三重県身体障害者総合福祉センター</p> <p>日本災害医学会</p> <p>日本災害リハビリテーション支援協会</p> <p>日本災害リハビリテーション支援協会</p>		
<p>研究業績等に関する事項</p>				
<p>著書、学術論文等の名称</p>	<p>単著・ 共著の別</p>	<p>発行又は 発表の年月</p>	<p>発行所、発表雑誌 等又は発表学会 等の名称</p>	<p>概 要</p>
<p>(著書)</p> <p>【これが脳神経外科看護 だ!】リハビリテーション</p>	<p>共著</p>	<p>2007年</p>	<p>Brain Nursing23巻 5号 Page462-470</p>	<p>脳神経外科領域の早期リハビリテーションについて記した。また呼吸器系合併症の予防やポジショニングを中心にまとめた。</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. アーチ高率の相違が片 脚立位時の筋活動に及ぼ す影響について</p>	<p>共著</p>	<p>2021年4月</p>	<p>ユマニテク短期 大学紀要第4号: 117-131</p>	<p>アーチ高率の違いにより、low arch 群 high arch 群の2群間に分け、安静立位での下肢アライメント、関節可動域、片脚立位時の筋活動の関係性について検討した。すべての評価項目に有意差は認められなかった。片脚立位時のアーチ高率を基準に low arch 群 high arch 群の2群間に分け検討したところ、leg heel angle のみ有意差</p>

)				がみられた。アーチ高率からアライメントを予測することは困難であった。また、各群の非荷重位から安静立位となった際に、アーチ高率の変化が大きい高変化率群と変化が小さい低変化率群における筋活動は似通っていた。そのため、今後はアーチ高率の変化の程度による筋活動の検討が必要であると考えられる。
<p>(その他)</p> <p>1. 右側頭頭頂葉梗塞後に発話面と書字面で乖離を生じた失語の1例</p> <p>2. 内転強直の変形性股関節症に対し人工股関節全置換術を施行した一症例</p> <p>3. MIS-TKA 超早期における筋力・ROM・疼痛の推移について</p> <p>4. 当院における THA クリニカルパス改訂に伴う T 字杖歩行可能時期の変化について</p> <p>5. 正常圧水頭症に対するタップテスト、シャント術前後の歩行能力</p> <p>6. 最小侵襲人工膝関節置換術後の歩行能力</p> <p>7. 大腿骨頭壊死症に対する大腿骨表面置換術後の理学療法の経験</p> <p>8. Japanese Undergraduates' Reticence toward Dialectic Pedagogy: Reasons and Remedies.</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2010 年</p> <p>2010 年</p> <p>2009 年</p> <p>2009 年</p> <p>2006 年</p> <p>2006 年</p> <p>2006 年</p> <p>2013 年</p>	<p>第 31 回国立大学法人リハビリテーションコ・メディカル学術大会誌 Page31-34</p> <p>第 20 回三重県理学療法学会 Page16-17</p> <p>理学療法学 (0289-3770)36 巻 Suppl.2 Page1523</p> <p>三重県理学療法学会 (1880-9561)20 回 Page36-37</p> <p>東海北陸理学療法学術大会誌 (1348-7493)22 回 Page64</p> <p>三重県理学療法学会 (1880-9561)17 回 Page18-19</p> <p>理学療法学 (0289-3770)33 巻 Suppl.2 Page80(2006.04)</p> <p>The Fifth Annual Asian Conference on Education, in Osaka, Japan</p>	